

中晩唐期へ苦吟の覺え書き

—「苦吟」という言葉の意味内容—

使用情況の検討を中心として —

岡田充博

I

中晩唐期の詩壇に見られる顕著な文学的風潮の一つに、所謂へ苦吟がある。賈島の「推敲」の故事などによって有名なこの風潮が、中晩唐詩を考察しようとする場合、無視できない重要性を持って浮かび上がってくることは、恐らく誰しもが認める所であろう。

しかし、それにも拘わらず、この風潮を何らかの文学史的な意味を持った潮流と見做し、正面から研究の対象に取り上げようとした試みは、意外なほど少ない。我が国における研究状況もその例に漏れず、このへ苦吟の風潮について専論した研究は未だに現われない。今、強いて教え上げるとすれば、昭和十九年に発表された豊田穰氏の「中晩唐詩の二傾向」(『東方學報』十五冊之一、養徳社刊)「唐詩研究」所収)が、或る程度まとまった体裁を備えた、ほとんど唯一のへ苦吟論ということになる。注1) ただ、この論文も実は本来、中晩唐

詩を、古典化々々、白話化々々という二つの傾向から論ずる意図の下に書かれたものであって、嚴密に言えばへ苦吟への專論ではない。そして、論文のこうした性格も影響してか、その内容も、もう一つの綿密さ・周到さに欠けるように思われるのである。

氏のへ苦吟への論の要旨は、論文中の次のような一節に集約的に示されていると見てよい。

「唐詩は盛唐になつて一まづ完成の域に達したのであるから、中晩唐にあつてはこれら完成の域に達した前賢の作品に、如何にして變化を生み出すかに極度の苦心が拂はれたのである。左の

其爲詩、劇目鉢心、鉤章棘句、搯擢胃腎、神施鬼設、間見層出、唯其大翫於詞、而與世抹殺・（韓愈・貞曜先生墓誌銘）

は、獨り孟郊だけではなく、當時の詩人のかかる苦心を物語るものであり、左の

都由苦思無休日、已證前賢不到心・（劉威・歐陽示新詩因貽四韻）

吟成五字句、用破一生心・（方干・貽錢塘縣路明府）

格與功俱造、何人意不降・（賈島・寄柳舍人）

一日不作詩、心源如廢井、筆硯爲轆轤、吟詠作廉纒、朝來重汲引、依舊得青冷、書

贈同懷人、詞中多苦辛・（同・戲贈友人）

などはいずれも前人の作品に對して變化を求めんと努力する際の生みのなやみの叫びである。従つて苦吟といふ習慣は、中唐から晩唐にかけての詩人達の避けることの出来な運命であつた。彼等は如何にこの苦吟なる試煉によつて、會心の作を生み出そうと身を傾け盡してゐたかは、左の諸例によつてよく窺はれる。

夜學曉未休、苦吟神鬼愁、
(孟郊・夜感自遣)

白鬚相並出、清淚兩行分、默默空朝夕、苦吟誰喜聞、
(同・秋暮)

生應無輟日、死是不吟詩、
(杜荀鶴・苦吟)

(『唐詩研究』一六〇、一六一頁)

豊田氏はここで、中晩唐期の「苦吟」を、盛唐詩的な表現世界からの脱皮とそれに伴う創造的労苦という、一つの文学史的な意味を持った思潮として抽出される。「苦吟」を当時の詩人達の奇矯さを伝える単なるエピソードとしてではなく、より深い意味を持った文学史的な現象として眺めようとした氏の姿勢は、勿論高く評価されるべきであろうし、また、その明快な結論にも確かに頷ける点はある。

しかし、中唐期から晩唐期にかけて、詩人達の間には熱病のように広まっていたこの風潮を定義し解明するには、右の所論は余りに簡便すぎはしないだろうか。「苦吟」は果して、前人の作品に対して變化を求めんと努力する際の生みめなやみしといった、単なる純文学的動機にもとづく創作上の労苦に過ぎなかつたのであろうか。私にはむしろ逆に、もっと複雑多様な豊かな内実が、「苦吟」の底に潜んでいるように思われてならない。豊田氏の明快な論旨は、恐らくその明快さ故にかえって、「苦吟」のそうした多様な内実を、小ぎれいな形に裁断してしまっているのである。

もっとも、氏の論文が「苦吟」についての専論ではない以上、そこに多くを期待するのほもととも無理な話かも知れない。或いは、本論の論旨を明確にする為に、敢て他の付随的な

部分の多様性を切り捨てざるを得ない場合があることは、私達自身もしばしば体験することである。しかし、そうした事情はともかくとしても、そこに語られている内容に満足できない以上、私達はあらためて、へ苦吟✓的風潮に対する様々な角度からの再検討を試みてみるべきではないだろうか。

本稿において私は、そのような考えに立った上での最初の試みとして、中晩唐期以前の詩文に見える「苦吟」という言葉の意味内容およびその歴史・使用情况等について考察してみることにした。そして、この作業を通じて、中晩唐期の詩人達におけるへ苦吟✓意識・あるいは当時のへ苦吟✓的風潮の実態といった点について、いくらかなりとも照明をあててみたいと思う。

いってみればこの論考は、中晩唐期のへ苦吟✓的風潮を当時の実情に沿って把え直して見る為の、一つの準備的な作業であり、従って、へ苦吟✓を文学史的な観点から包括的に論じてゆける地点にはなお程遠い。しかし、こうした極く初歩的な貧しい考察によっても、豊田氏の「生みのなやみ」といった観点が見過していたへ苦吟✓の、或る側面を確認することは可能であろうし、また、そこから、へ苦吟✓的風潮を検討してゆく上での若干の問題点は指摘できるのではないかというのが、筆を執るにあたっての、私自身の手前勝手な予測である。

注ノ… この他、中晩唐期のへ苦吟✓的風潮に触れた論文として、上尾龍介氏の「苦吟と象徴——李賀の表現手法について——」(『九州中国学会報』第二巻)があるが、内容的にはおおむね豊田氏の所説と一致する。

なお、邦文以外のものとしては、胡雲翼「論苦吟」(『北新半月刊』第十一・十二合刊号所収)・陳子展「唐代詩人苦吟的生活」(『微音月刊』九・十期合刊号所収)の二論文があるが、いずれも未見。

II

「苦吟」という言葉は、普通、「苦心して詩歌を作る」といった、詩文創作上の呻吟勞苦を示す意味内容で理解されることが多いようである。今、手元の辞書類を開いてみても、その説明は、すべてこうした意味理解の下になされている。

「骨折って詩歌を考へ作る。又、其の作。」(諸橋轍次『大漢和辭典』)

「くるしんで詩歌を作ること。又、其の作。」(小柳司氣太『新修漢和大辭典』)

「くるしみて詩をつくる。」(簡野道明『増補字源』)

「苦心して詩・歌・俳句などを作る。」(貝塚茂樹^他『角川漢和中辭典』 小川環樹^他)

『角川新字源』)

「辛苦爲詩文也。」(『中文大辭典』)

なお、『辭源』『辭海』『辭通』『聯珠辭典』といった中国の辞書には、「苦吟」の項目がない。

先に引用した「中晚唐詩の二傾向」に見える豊田氏の「苦吟」観（「前人の作品に対して變化を求めんと努力する生みのなやみ」）も、「苦吟」という言葉に対するこのような意味理解の方向と、ほぼ共通した地盤の上に立っている。

確かに「苦吟」という言葉は、その内に、そうした意味を間違ひなく含み持ってはいる。しかし、だからといってこの言葉の意味内容が、単純に「苦心して詩歌を作る」といった規定で割り切られてよいとは限らない。

たとえば、この言葉のおおよその意味内容を確かめる為に、「詩話總龜」（宋・阮閱撰）の「苦吟門」を開いてみよう。

成程ここには、詩人達の詩作上の「苦」を主題にした、左のような内容の詩話・エピソードの類が多く収められてはいる。

潘闓自號逍遙子、作苦吟詩 潘闓 自ら逍遙子と号し、苦吟の詩を作りて曰く、「髪

曰、髮任莖莖白、詩須字字 是莖莖 白きに任すも、詩は須らく 字字 清かるべし

清。（『江南野錄』）と。

唐人爲詩常積思數十年、然 唐人 詩を爲るに常に思いを積めること數十年にして、

後各自名家、杜少陵云、更 然る後に 各々 自ら名家たり。杜少陵云えり「更に覺

覺良工用心苦、豈特我哉。
(『古今詩話』)

ゆ 良工 用心の苦しと。豈に特だ我のみならんや。

賈島元和中嘗跨驢張蓋、橫

賈島 元和中に嘗て驢に跨り蓋を張り、天街を横截す。

截天街、時秋風正厲、黃葉

時に秋風正に厲しく、黃葉掃うべし。島吟じて曰

可掃、島吟曰、落葉滿長安、

く、「落葉 長安に滿つ」と。一聯を求むるに得べから

求一聯不可得、不知身之所

ず。身の從う所を知らず、因りて京兆の尹・劉栖楚の節

從、因衝京兆尹劉栖楚節、

に衝る。繫がること一夕にして之を釈す。

被繫一夕釋之。

しかし、同じ二の「苦吟門」に、次のようなエピソードが見えるとなると、この言葉が狭義に詩作上の労苦のみを指して用いられるとは、必ずしも言えなくなつて来る。

李昇受禪之初、忽半夜寺僧

李昇 受禪の初め、忽かに半夜 寺僧 鍾を撞き、滿城

撞鐘、滿城皆驚、召將斬之、

皆な驚けり。將を召して之を斬らんとするに、對えて云

對云、夜來偶得月詩、乃曰、

えり、「夜來、偶また月の詩を得たり」と。乃ち曰く、

徐徐東海出、漸漸上天衢、
此夕一輪滿、清光何處無、
喜釋之。(『江南野錄』)

「徐々として東海より出で、漸々として天衢に上る。此
の夕べ一輪満てり、清光何処か無からん」と。喜_め
でて之_を釈す。

龐穎公喜爲詩、雖臨邊典郡、
文案委前、日不廢三兩篇、
以此爲適、及疾甚、余時爲
諫官、以十餘篇相示、手批
其後曰、欲令吾弟知老夫疾
中尙有此思耳、字已慘淡難

識、數日薨。

(『閒居詩話』)

龐穎公 詩を爲るを喜び、辺に臨み郡を典_{つかさ}り、文案 前
に委_つもるといへども、日に三兩篇を廢さず、此_を以て
適_{たのしみ}と爲す。疾_{やま}甚だしきに及び、余 時に諫官たり。
十餘篇を以て相_あい示し、手_まずから其の後に批して曰く、
「吾弟をして老夫の疾中に尙_なお此_この思_しい有るを知ら令_しめ
めんと欲するのみ」と。字_じすでに慘淡として識_しり難く、
數日にして薨_しず。

ここに見える「苦吟」は、詩作上の勞苦というよりも、むしろ詩作へのエキセントリック
なまでの耽溺である。とすれば、題辭の「苦吟」は、「苦心して詩歌を作る」といった辭書

的な意味よりも一層広い、「詩作への没頭・耽溺」の意味内容を含み持って使用されているのではないだろうか。

この他、さらに時代を下った用例になるけれども、元の辛文房の『唐才子傳』には、次のような「苦吟」の用例が見られる。

(司空) 圖字表聖、河中人 (司空) 圖字は表聖、河中の人なり。……性苦吟也。……性苦吟、舉筆緣興にして、筆を挙げ興に緣れば 幾千万篇たり。

幾千萬篇。(卷八・司空圖)

ここには、「二句三年得、一吟双淚流」(『題詩後』)と歌った賈島の苦吟とは全く対照的な、能筆で多作なタイプの詩作への没頭が示されている。つまり、ここで言う「苦吟」は、^レひたすらな詩作への耽溺の姿勢^ヲを専ら指し示している訳であり、そこには、^レ詩作上の呻吟勞苦々々^トといった要素の介入の余地は、ほとんど存在しないのである。

以上、宋代以降の用例をもとにして「苦吟」の意味内容を一瞥してみたが、ここからも明らかのように、「苦吟」は必ずしも単純に、「苦心して詩歌を作る」といった定義のうちに収まる言葉ではない。とすれば、中晩唐期ないしはそれ以前の時代の「苦吟」の意味内容についても、私達は、何の検討もなしにいきなり辞書的な意味を押しつける訳にはゆかないであろう。この言葉の正確な意味内容を押える為にも、またさらには、この言葉によって示される文学的風潮の内容を明確に規定する為にも、「苦吟」の意味内容の通時的・共時的な考

察が是非とも必要になつてくるのである。

「苦吟」の意味内容を検討する為には、まず可能な限り多くの用例を収集することが先決問題である。しかし、上古から中古にわたる浩瀚な言語資料のすべてを渉猟して「苦吟」の用例を拾い出すのは、恐らく個人的能力の限界を超えよう。そこで私としては、対象を丁福保『全漢三國晉南北朝詩』と『全唐詩』、それに『文選索引』等をはじめとする既成の索引・辞書類に絞つて調査を行なつてみた。従つて、詩作品以外の資料については極めて杜撰ではあるが、それでも、この言葉の使用情況、意味内容について、大まかな見通しをつけることは可能であると考ええる。

詩作品を中心とした私の大まかな調査による限り、「苦吟」という言葉の使用例は、六朝期以前には一例も検出することができなかった。これだけの結果から「苦吟」という言葉の六朝期以前の使用状況を云云することは、かなりの無理を伴なうかも知れない。しかし、少なくともここから、次のような推定を下すことは許されよう。

「苦吟」という言葉は、六朝期以前においては、まだ常用語としての市民権を獲得していなかったようである。また、現存する六朝期以前の詩作品中にこの言葉が一例も見出されないことからは、考えて、「苦吟」が当時まだ詩的言語として認識されるに至っていないことが、ほぼ確実である。

私が検出することのできた「苦吟」の使用例のうち、時代的に最もはやいのは、初唐末の

陳子昂の「南山家園林木交映盛夏五月幽然清涼獨坐思遠率成十韻」詩と郭震の「望」詩である。

先ず郭震の詩の用例から見てみよう。

愁殺離家未達人 愁殺す 家を離れて未だ達せざるの人を

一聲聲到枕前聞 一声 声は到りて枕前に聞ゆ

苦吟莫向朱門裏 苦吟 向かうこと莫かれ 朱門の裏に

滿耳笙歌不聽君 滿耳の笙歌に君に聴かず

なるほど「苦吟」という言葉は見えるけれども、しかしその意味内容は、先程の宋代以降の使用例に見られた。詩作上の労苦、詩作への耽溺といった意味とは、かなり異なっているようである。ここで用いられている「苦吟」は、むしろ「コオロギの愁苦に満ちた鳴き声」、ないしは「愁苦・憂苦に満ちた歌声」といった意味に取られるべきであろう。また、陳子昂の場合、次のような用いられ方をしている。

坐觀萬象化 坐して觀る 万象の化するを

方見百年侵 方に見る 百年の侵すを

擾擾將何息

擾々 將に何なくにか息いきわんとす

青青長苦吟

青々 長く苦吟す

願隨白雲駕

願わくば白雲の駕かに隨まい

龍鶴相招尋

龍鶴と相あい招尋せん

ここに用いられている「苦吟」は、正確な内容把握が難かしい。しかし、文脈から判断するところ、「（長く）吟詠にふける」といった意味と考えて大過はないであろう。没頭的な姿勢を示す意味を含んで用いられている点に、後の「苦吟」の用例との共通項が見出されるが、ただその没頭的姿勢には、「度を過ぎた耽溺」といった一種エキセントリックなニュアンスは感じられない。また、「吟」字は、詩作行為よりもむしろ詩歌をロズさむとリった吟詠行為を指して用いられているようでもあり、こうした点から見て、後の「苦吟」が持つ「詩作への（度を過ぎた）耽溺」といった意味との間の差異は、見かけ以上に大きいように思われる。

初唐詩における「苦吟」の使用例は、私が『全唐詩』を通覧してみた限りにおいては、この他に見当たらない。続く盛唐期の詩作品においてはさらに少なく、「苦吟」の用例は全く見出すことができない。従って、盛唐期以前の詩作品においては、一般にこの言葉の通常的な意味内容と考えられている、「苦心して詩歌を作る」といった意味での使用例は、まだ登場してこない。

さて、以上の考察をもとにして、私達は次の点を確認しておくことができる。すなわち、

「苦吟」という言葉は、初唐期に至ってはじめて、詩語として用いられた例を見出すことができる。ただし、それらは「愁苦・憂苦に満ちた歌声（または、そうした歌をうたう）し、ないしは「吟詠にふける」といった意味で用いられており、後に見られるような、詩作への（度を過ぎた）耽溺・詩作上の呻吟労苦を示す意味内容は、まだ持ち合わせていないようである。また、初盛唐期の詩作品全体を通じて僅か二つの使用例しか見当たらないという事実から推し測って、この言葉が当時の詩人達の意識内に占める位置は、極めて軽いものに過ぎなかったと考えられる。」

なお、初盛唐期およびそれ以前の詩作品を通じて言えることであるが、「苦吟」という言葉以外の詩語・詩句に注目してみても、宋代以降の「苦吟」に相当する意味内容を備えた言葉は見当たらない。外見上「苦吟」に類似した言葉としては、「苦言」「苦調」などがあげられるが、次の例からも明らかかなように、それらは「愁苦に満ちた調べ・詩歌」といった意味内容で用いられており、詩作上の労苦・詩作への耽溺を示す意味は持っていない。

義心多苦調　　義心には苦調多く

密比金玉聲　　密なること金玉の声に比たぐう

（顔延之「秋胡詩」）

悲情臨川結 悲情 川に臨んで結ばれ

苦言隨風吟 苦言 風に隨いて吟ず

(陸機「贈馮文麗」)

思婦臨高臺 思婦 高台に臨み

長想馮華軒 長想 華軒に馮る

弄絃不成曲 絃を弄ずれども曲を成さず

哀歌送苦言 哀歌して苦言を送る

(王景玄「雜詩」)

ただ、これらの「苦言」「苦調」が、先の郭震の「蛩」詩に見えた「苦吟」の意味内容と類似していることは、注目しておくべきであろう。

宋代以降の「苦吟」と内容上類似する言葉としては、「苦言」「苦調」よりもむしろ「沈吟」をあげるべきかも知れない。たとえば、これは詩作品ではないけれども、劉勰の「文心雕龍」に次のような用例が見える。

詩總六義、風冠其首、…… 詩は六義を総べ、風は其の首に冠す。……

是以怳悵述情、必始乎風、

是を以て怳悵して情を述ぶるは、必らず風に始まり、沈

沈吟鋪辭、莫先於骨、

吟して辭を鋪くは、骨より先なるは莫し

(風骨篇・第二十八)

春秋代序、陰陽慘舒、物色

春秋は代序し、陰陽は慘舒す。物色の動けば、心も亦た

之動、心亦搖焉、……………

揺らぐ。……………

物色相召、人誰獲安、……………

物色の相あい召くに、人誰か安きを獲ん。……………

是以詩人感物、聯類不窮、

是を以て詩人の物に感ずれば、類をつら聯ねて窮まらず。万

流連萬象之際、沈吟視聽之

象の際に流連し、視聽の区に沈吟す。

區

(物色篇・第四十六)

ここに見える「沈吟」は、「心をこめ、思いをこらして詩作する」といった意味であろう。とすれば、そのような詩作行為への沈潜は、必然的に耽溺的姿勢・雕琢上の労苦を伴う訳であり、そうした点から考えれば、この「沈吟」という言葉には、前掲の宋代以降の「苦吟」の使用例と極めて近い意味内容が含まれてゐることになる。しかし、ここで見逃されてならないのは、それにも拘わらず右の「沈吟」が、後の「苦吟」という言葉に特有の一種エキセ

ントリックな（ないしはモノマニアックな）ニュアンスを欠いており、文脈から判断する限りでは、遂に極めてノーマルな、漠然とした形での詩作への沈潜を示しているように見受けられる点であろう。つまり、右の「沈吟」は、後の「苦吟」の意味内容をも含み得るかなり広範囲な詩作への沈潜一般を意味の対象としながらも、かえってその漠然とした広義性ゆえに、その内に含まれる「苦吟」的要素（「詩作行為における度を過ぎた没頭・呻吟労苦」）に対しては、半ば無自覚的なままで用いられているのである。

次に詩作品中に用いられた「沈吟」について眺めてみると、意味の重点は専ら「物思いに沈んで吟詠にふける」、或いは単に「物思いに沈む」「物思いにふける」〔注2〕と、沈潜的な姿勢を示す方向にのみ置かれていようであり、詩作上の労苦を示す意味はほとんど皆無と言つてよい。二、三例を挙げてみよう。

青青子衿　　青々たる子が衿

悠悠我心　　悠々たる我が心

但爲君故　　但だ君が為の故に

沈吟至今　　沈吟　今に至る

（曹操「短歌行」）

留情顧華寢

情を留めて華寢を顧み

遙心逐奔龍 心を遙かにして奔龍を逐う

沈吟爲爾感 沈吟 爾が為に感ず

情深意彌重 情深くして 意彌よ重なる

(謝惠連「七月七日夜詠牛女」)

意欲巢君幕 意は君が幕に巢くわんと欲するも

層楹不可窺 層楹 窺うべからず

沈吟芳歲暮 沈吟す 芳歳の暮

徘徊韻景移 徘徊すれば 韻景移る

(鮑照「詠雙燕」)

そして、右の沈吟にもやはり、宋代以降の「苦吟」の用例に窺われたようなエキセントリックなニュアンス・モノマニアックなニュアンスはない。これらの用例はむしろ、先の陳子昂の詩に見えた「苦吟」の意味内容と類似しているようである。

散文関係の資料に対する私の調査は、先にも述べたように極めて不備である為、ことさら一項を設けて論ずることは断念せざるを得ない。しかし、敢えて飛躍を恐れずに言うならば、

私達は以上の僅かな資料のみによつても、「苦吟」という言葉の初源的な意味内容について、おぼろげながら次のように想像しておくことができよう。すなわち、

「苦吟」という言葉は、郭震の用例から想像するところ、本来、「苦言」「苦調」と同類の用語だったのではないだろうか。陳子昂の詩に見える「沈吟」的な意味内容での用例は、「苦言」「苦調」に較べると「苦」字の意味が複雑かつ高次であり、ここから判断してこの意味内容は、「苦言」的意味内容よりも後れて誕生したのではないかと想像される。

いずれにせよ、初盛唐期までの「苦吟」は、「苦言」「苦調」あるいは「沈吟」といった言葉のグループに属し、意味の上では、それらの言葉からなお未分化の状態にあつたようである。この「苦吟」という言葉が独自の内容・ニュアンスを伴なつて現われて来る為には、「苦言」のくろしみ一般の中から「詩作上の生みの苦しみの意味が、また、「沈吟」の沈着的態度一般の中から「詩作上のへ度を過ぎた「耽溺」の意味が、殊に強く意識され、それらを表現する言葉としてこの「苦吟」が再発見されるようになる。新たな情況を待たなければならぬ。

「苦吟」という言葉の初盛唐期までの意味内容・使用情況は、私自身の拾り出した資料にちとづく限り、おおよそ以上の通りである。

ただ、私達はここで、思い違ひのないよう次の点についてあらためて確認しておく必要が

ある。それは、詩作行為における呻吟勞苦とか、度を過ぎた耽溺とかいった内容の言葉が詩作品中に見えないという事実は、決してこの時代の詩人達にそうしたへ苦吟の行為がなかつたことを意味するものではない、という点である。

文学作品の創出にまつわる創造的勞苦は、おそらく文学における個的な作家意識の誕生とともに半ば必然的に生起するものであって、それは何も中晩唐期のみに限って見られる現象ではない。事実私達は、中晩唐期に限らずそれ以前の文学者達についても、そうした文学的創造にまつわる常軌を逸した勞苦・耽溺の例を、いくつも拾い出すことができる。

司馬相如爲上林子虛賦、意
司馬相如、上林・子虛の賦を爲るに、意思蕭散し、復た

思蕭散、不復與外事相關、
外事と相あ関わらず。天地を控引し、古今を錯綜し、

控引天地、錯綜古今、忽然
忽然として睡おひるが如く、煥然として興おき、幾百日にして

如睡、煥然而興、幾百日而
而ひかる後に成なる。……

後成……
(『西京雜記』卷二)

桓譚新論曰、余少時見揚子
桓譚が新論に曰く、「余わか少わかき時、揚子雲の麗文高論を

雲之麗文高論、不自量年少
見、自ら年少新進なるを量はからずして、猥みたりに速お及よばんと

新進、而猥欲速及、嘗激一
欲す、嘗て一事に激して小賦を作りしに、精思を用うる

事、而作小賦、用精思太劇、
而立發疹、
こと太だ劇しくして、立ちどころに疹を發せり。

(『藝文類聚』卷七十五 方術部・疾)

張衡字平子、南陽西鄂人也、
張衡 字は平子、南陽西鄂の人なり。

衡乃擬班固兩都、作二
衡 乃ち班固が兩都に擬して二京の賦を作り、因りて以

京賦、因以諷諫、精思傳會、
て諷諫せんとなす。精思傳會、十年にして乃ち成る。

十年乃成、

(『後漢書』卷五十九 張衡傳)

左思字太沖、齊國臨淄人也、
左思 字は太沖、齊國臨淄の人なり。

造齊都賦、一年乃成、
齊都の賦を造り、一年にして乃ち成る。復た三都を賦さ

復欲賦三都、遂構思十
んと欲し、遂に思いを構うるこゝ十年なり。

年、門庭藩溷皆著筆紙、遇
門庭・藩溷に皆な筆紙を著き、遇ま一句を得れば、即便

得一句、即便疏之、
ち之を疏せり。

(『晉書』卷九十二・文苑傳・左思)

謝靈運 半日吟詩百篇、頓落

謝靈運

半日

詩を吟ずること百篇、頓にわかに十二齒を落

とす。

十二齒、

とす。

(『雲仙雜記』卷六)

(崔)融爲文華婉、當時未

(崔)融

文を為つくること華婉にして、當時未いまだ輩なぶ者

有輩者、朝廷大筆、多手救

有あらず。朝廷の大筆、手救して之これに委ゆたぬること多し。

委之、譔武后哀冊最高麗、

武后の哀冊を譔し、最も高麗にして、筆を絶ちて死せり。

絶筆而死、時謂思苦神竭矣、

時に思おもひ苦しみ神竭つけりと謂いう。

(『唐詩紀事』卷八・崔融)

孟浩然、眉毫盡落、裴祐袖手

孟浩然是眉毫ニヒト尽ことごとく落ち、裴祐は袖手して衣袖穿あるるに至

衣袖至穿、王維至走入醋甕、

り、王維は走はりて醋甕に入るに至る。皆みな苦吟せし者ものな

皆苦吟者也。

り。

さらにまた、裴子野の『雕蟲論』・鍾嶸の『詩品』などに見える次のような記事によれば、
へ苦吟✓的な作詩態度は、六朝期においても一種の文学的風潮を形造っていたようである。

宋明帝博好文章、才思郎捷、

宋の明帝 博く文章を好み、才思郎捷にして、常に書奏

常讀書奏、號稱七行俱下、

を讀むに、七行俱ともに下ると号稱す。 稹祥および讌集に

每有稹祥及幸讌集、輒陳詩

幸する有る毎ごとに、輒すなわち詩を陳ね義を展のべ、且かつ以もつて朝臣

展義、且以命朝臣、其戎士

に命ず。其れ戎士武夫も則ち託請するに暇あらず、課限

武夫、則託請不暇、困於課

に困しみ、或いは買いて以て詔に応ぜり。是こゝに於おりて天

限、或買以應詔焉、於是天

下風に向かい、人は自ら藻飾し、雕虫の芸、時に盛んな

下向風、人自藻飾、雕蟲之

り。

藝、盛於時矣、

(裴子野『雕蟲論』)

非陳詩、何以展其義、非長

詩を陳こらぬるに非ざれば、何を以てか其の義を展のべん。長

歌、何以騁其情、……

歌するに非ざれば、何を以てか其の情を騁せん。……

今之士俗、斯風熾矣、纔能

今の士俗 斯の風熾なり。纔かに能く衣に勝え、甫め

勝衣、甫就小學、必甘心而

て小学に就けば、必ず甘心して駢驚す。是に於いて庸音

駢驚焉、於是庸音雜體、人

雜體、人各の容を為し、膏腴の子弟をして文の逮ばざる

各爲客、至使膏腴子弟、恥

を恥じ、終朝点綴し、分夜 呻吟せしむるに至れり。

文不逮、終朝点綴、分夜呻

吟、（鍾嶸 詩品 序）

このような例が見られる以上、私達は、初盛唐期以前の詩人達がへ苦吟を行為と全く無縁であったと言ふことはできない。とすれば、当時の詩作品にそうしたへ苦吟を歌う詩語・詩句が見えないという事実は、むしろ次のように考えられるべきではないだろうか。

へ苦吟とは、程度の差はあれ、文学家ならば誰しもが半ば不可避にくぐり抜けねばならぬ創造上の試練であり、従つてそれは、初盛唐期以前の詩人達においても例外ではなかつた。しかし、当時の詩人達の意識においては、へ苦吟を行的な行為は、表沙汰にして自ら標榜すべき性格のものとも、或いは詩作品中に歌うに相応しい素材とも、決して考えられていなかつたのであろう。初盛唐期以前の詩作品にへ苦吟を歌う詩語・詩

句が見えないのは、恐らく、へ苦吟✓に対するそうした何らかの自覚意識ないしは価値意識の在り方に起因するものであって、当時の詩人達におけるへ苦吟✓行為の有無とは必らずしも関係ない。

以上 「苦吟」という言葉の使用情況・意味内容について、初盛唐期に至るまでを概観してみた。この結果を詩人達の文学意識と結びつけて考えるならば、私達は初盛唐以前の時期を、へ苦吟✓行為はあってもそれがまだ特別な自覚・価値意識を伴なうて再認識されるには至っていない時代、と考えてよいであろう。〔注3〕

さて次に、盛唐末から中唐初期にかけての詩作品を眺めてみると、「苦吟」という言葉は見当たらないが、詩作上の労苦ないしはそうした創作行為への耽溺を歌う詩句・詩語を、いくつか拾い出すことができる。

爲人性僻耽佳句 人と為り性僻にして佳句に耽り。

語不驚人死不休 語人を驚かさずんば 死すとも休まず

(杜甫「江上值水如海勢聊短述」)

知君苦思緣詩瘦 知る 君が苦思して詩に縁りて瘦せたるを

太向交遊萬事慵

ただ交遊まかに向むかつて万事まのう慵よし

(同「暮登四安寺鐘樓寄裴十迪」)

水涵秋色靜

水は秋色を涵みして靜かに

雲帶夕陽高

雲は夕陽を帯びて高し

詩癖非吾病

詩癖は吾が病はまるところに非あらざれば

何妨吮短毫

何ぞ短毫を吮なめるを妨げん

(錢起「江行無題」)

詩思應須苦

詩思まにまにまにま須すらく苦くしむべし

猿聲莫厭聞

猿聲 聞きくを厭いとう莫なかれ

(同「送李秀才落第遊荆楚」)

私達はここに、「苦吟」という言葉が詩作上の勞苦・耽溺を示す意味内容を含み持つて用いられるようになる、その直前の情況を窺うことができる訳であるが、なかでも注目しておきたいのは、右の詩人達の意識のうちに見られる、へ苦吟✓行為に對する新たな自覺・価値意識であろう。へ苦吟✓行為が詩の素材たりうるという意識・さらにはそれが詩中に公表し

て自ら誇るに足りうる文学行為であるという自覚は、文学史上においても極めて重要な意義を持った認識に違いない。そして、このような新たな文学認識を備えた詩精神の誕生を待つてはじめて、「苦吟」という言葉は、詩作上の労苦・耽溺を示す意味内容を含み持つことが可能となったのである。

初盛唐期まではほとんど見当らなかつたこの「苦吟」という言葉が、詩作品中に頻見されるようになるのは中唐期、それも孟郊・賈島らのいわゆる苦吟派の詩人達が活躍する貞元・元和期あたりからのことになる。そして、従来この言葉の通常のな意味内容と考えられていた詩作上の呻吟労苦の意味は、この時期に至つてはじめて明確な形を取るようになるのである。

たとえば、「苦吟」と題された左の二篇の作品は、この言葉が中晩唐期に至つてはじめて持つようになったそうした新たな意味内容に対する、生きた形での解説として読むことができよう。

秋夜苦吟

杜荀鶴

吟盡三更未著題

三更を吟じ尽くして未だ題を著さず

竹風松雨共淒淒

竹風 松雨 共に淒々たり

此時若有人來聽

此の時 若し人の來り聴く有らば

如覺巴猿不解啼

巴猿も啼くこと解わざるを覺ゆるが如くならん

苦吟 盧延讓

莫話詩中事

話す莫かれ 詩中の事を

詩中難更無

詩中 難きこと更なるは無し

吟安一箇字

一箇の字を吟安するに

然斷數莖鬚

數莖の鬚を然斷す

險覓天應悶

險覓 天は応に悶ゆるべく

狂搜海亦枯

狂搜 海も亦た枯るべし

不同文賦易

同じからず 文賦の易くして

爲著者之乎

爲に者之乎を著せるに

この他、詩話として用いられた例の中から二、三挙げれば、次のようなものがある。

到曉改詩句

あけつき 曉に到るまで詩句を改め

四隣嫌苦吟

四隣は苦吟を嫌いとう

(劉得仁「夏日即事」)

自小僻於詩

おきな 小きより詩に僻にして

篇篇恨不奇

篇々 奇ならざるを恨む

苦吟無暇日

苦吟 暇日無なく

華髮有多時

華髮 多時を有す

(杜荀鶴「投李大夫」)

莫怪苦吟遲

怪しむ莫なかれ 苦吟の遅なきを

詩成鬢亦絲

詩成なりて鬢亦また絲しつとのごとし

鬢絲猶可染

鬢絲は猶お染むべきも

詩病却難醫

詩病は却かえって医いし難がたし

(裴説「寄曹松」)

中晩唐期に至ってはじめてあらわれたこのような「苦吟」の用例が、この時期の「苦吟」の風潮と密接な関わりを持つ、最も特徴的な使用例であることには、確かに異論の余地はない。しかし、ここから「苦吟」という言葉の中晩唐期における意味内容を、従来の辞書の解説に見られたような「苦心して詩歌を作ること」といつた単純な規定のうちに取り上げてしまうのは、やはり正しくないであろう。というのは、先ず第一に、右の用例の中にも詩作行為の耽溺を示す意味要素が同時に含まれているのではないかと——という点が指摘できるのであるし、またその点はさておいたとしても、この時期の「苦吟」の使用例の中には、右の用例とは明らかに内容を異にするものが、いくつか見出されるからである。今、そうした用例を挙げてみると、次のようなものがある。

寒窗危竹枕

寒窓 竹枕危たふく

月過半牀陰

月過よきりて 半牀かげ陰る

嫩葉不歸夢

嫩葉 帰夢ならず

晴蟲成苦吟

晴虫 苦吟を成す

酒無通夜力

酒は夜を通ずるの力なく

事滿五更心

事は五更の心に満つ

寂寞誰相似

寂寞 誰にか相あい似しめさん

残燈與素琴 残燈のちと 素琴と与ともにす

(劉威 「冬夜旅懷」)

旅愁に沈む作者の心を一層切なくさせるのが虫の「苦吟」の声であるとすれば、この場合の「苦吟」は、前にあげた郭震の「蛩」詩の用例と同一の、「愁苦に満ちた鳴声・歌声」といった意味であろう。

またこの他に、詩作品以外の資料の中からはあるが、左のような用例も見られる。

余少爲江南客、而未游秣陵、

余おが少くして江南の客と爲るも、未だ秣陵に遊ばず、嘗

嘗有遺恨、後爲歷陽守、

に遺恨あり。後に歷陽の守と爲り、つまた又之を望む。適

而望之、適有客以金陵五題

ま客の金陵五題を以て相あ示す有り、適爾として思いを

相示、適爾生思、歟然有得、

生じ、歟然として得る有り。他日、友人の白樂天 ミヤ又を

他日友人白樂天掉头苦吟、

掉ふりて苦吟し、嘆賞良やや久しうせり。……

嘆賞良久……

(劉禹錫 「金陵五題」序)

李太白初自蜀至京師、舍於

李太白 初めて蜀より京師に至り、逆旅に舍す。賀監知

逆旅、賀監知章聞其名、首章其の名を聞き、首めて之を訪ぬ。

訪之、

賀又見其鳥榑曲、歎賞苦吟 賀 また其の鳥榑の曲を見、歎賞苦吟して曰く、「此の

曰、此詩可以泣鬼神矣、詩 以て鬼神をも泣かしむべし」と。

(孟榮「本事詩」高逸第三)

この場合の「苦吟」は、「しきりに吟詠する」「ねんごろに心をこめて吟詠する」といった意味であろう。「苦」字が「労苦・辛苦」あるいは「憂苦・愁苦」といった意味とは別の、「しきりに」「ねんごろに」といった、没頭的な姿勢を指す意味内容で用いられている点に注目される。これらは、先の陳子昂の詩の「苦吟」に連なる用例と考えられる。

このように中晩唐期の「苦吟」という言葉のうちには、初唐期の使用例に見えたいわば初源的な意味内容が、依然としてその生命を保ち続けている。そして、そうである以上、厳密に考えた場合の中晩唐期の「苦吟」の意味内容は、「苦心して詩歌を作る」といった単純な内容規定で割り切る訳にはゆかないことになって来るのである。

もつとも、これら初源的な意味内容での用例は、右の例から判断する限りにおいて、詩作行為を指して用いられてはいない。従って、へ苦吟の風潮の考察を前提として、詩作行為と関わり合う意味内容の「苦吟」を検討してゆくとする際には、これらの用例は無視して差支えないように思われるかも知れない。しかし、現実の中晩唐期の詩作品中に見える

「苦吟」の用例を検討してみると、私達はその過程で、詩作行為を指して用いられながらこれら初源的な意味内容と複雑に絡み合った内容を持つ「苦吟」にしはしはゆき当ることになり、そうした意味内容を当初から無視してかかるべきではないことを、改めて確認させられるのである。

たとえば、「心をこめて吟詠する」「吟詠にふける」といった没頭的な姿勢を示す意味内容については、ことさら取り立てて指摘するまでもないであろう。「苦吟」という言葉のうちから存在していたこの意味内容は、この言葉が中晩唐期、詩作行為を指して用いられる場合においても、極めて本質的で大きな位置をその中で占めていると見て良い。つまり、詩人によってなされる詩作行為が彼の心をこめた没頭の姿勢に支えられていさえすれば、それが如何なる詩作行為であれ、必然的にそこに、この「心をこめる」「ふける」といった意味が「苦吟」の一つの意味要素として融合してくる余地が生ずる訳であり、この点から言つて、たとえば先の杜荀鶴・盧延讓・劉得仁・裴說の作品に見えた「苦吟」などは、この没頭の姿勢を示す意味要素が「詩作行為への度を過ぎた耽溺」といった特殊なニュアンスにまで強められて使用された例とも考えられるのである。

また、一方の「愁苦に満ちた歌声」といった意味内容の融合の例としては、左のような詩を挙げる事が出来よう。

天地唯一氣　　天地は唯だ一氣なるに

用之自偏頗　　之これを用いることおのずか自ら偏頗なり

憂人心成苦吟 憂人心 苦吟を成し

達士爲高歌 達士 高歌を為す

君子識不淺 君子 識 浅からず

桂枝憂更多 桂枝 憂うれいは更さらに多し

(孟郊「送別崔寅亮下第」)

無祿奉晨昏 無祿 晨昏に奉じ

閑居幾度春 閑居 幾たびか春を度わたれり

江湖苦吟士 江湖 苦吟の士

天地最窮人 天地 最窮の人

(杜荀鶴「郊居即事投李給事」)

旅館坐孤寂 旅館 孤寂に坐し

出門成苦吟

門を出て苦吟を成す

何事覺歸晚

何事ぞ帰るの晩きを覚ゆるは

黄花秋意深

黄花 秋意深ければなり

寒蝶戀衰草

寒蝶 衰草を恋い

軫我離郷心

我が離郷の心を軫ましむ

(于瀆「旅館秋思」)

夜倚臨溪店

夜に溪に臨むの店に倚り

懷郷獨苦吟

郷を懷いて独り苦吟す

月當山頂出

月は山頂に當りて出で

星倚水湄沉

星は水湄に倚りて沈む

(韋莊「信州溪岸夜吟作」)

これらの詩に見える「苦吟」は、いずれも詩作行為を示す意味内容を持って用いられてい

ると見てよいであろうが、文脈から判断する限りでは、孟郊・杜荀鶴の詩の「苦吟」には不遇感に伴なう憂苦・苦惱の感情が、于漬・韋莊の詩の「苦吟」には旅愁から来る愁苦の感情がそれぞれ重ね合わされておられ、そこには、「憂苦・愁苦に満ちた歌声（なりしは、そうした憂苦・愁苦を詩に歌う）」といった初源的な意味内容の並存が、明らかに読み取れるのである。

中晩唐期における「苦吟」の使用情況は、大まかに言って以上のようなものであるが、ここから私達は、この時期における「苦吟」の意味内容について、おぼろげながら次のように考えることができる。すなわち、

中晩唐期の「苦吟」という言葉は、最も特徴的な意味としては、従来の辞書の説明に見られるような詩作上の労苦を示す意味内容を持つが、しかし一方、初唐期の例に見られた意味内容も、依然としてその生命を失なつてはいない。従つて、今この時期の「苦吟」の意味範囲を図表の形であらわすとすれば、次のようになるう。（便宜上、「苦」字と「吟」字とに分ける形で整理してみる。）

- 「苦」
- (1) 現実的な生活感情としての憂苦・愁苦。
 - (2) 心をこめる・沈潜・没頭する。
 - (3) 詩作行為における苦心・労苦。

- 「吟」
- (一) 鳴声・歌声・吟詠。
 - (二) 詩作行為。

〔注4〕

またこれらの意味要素は、この言葉が詩作行為を指して用いられる場合においても、かなり恣意的な融合現象を見せている様であり、それ故私達は、詩作行為を指して用いられる場合の「苦吟」の意味内容についても、従来の辞書の説明のように単純に「苦心して詩歌を作ること」といつた定義で割り切ることはできない。

もつとも、そうは言っても、中晩唐期の「苦吟」の使用例中で殊に多く目につくのは、詩作上の呻吟勞苦・およびそうした勞苦に満ちた詩作行為への没頭・耽溺といつた意味における用例であり、こうした意味内容が、詩作行為を指して用いられる場合の当時の「苦吟」の中心的位置を占めていたことは、やはり否定できない事実である。しかし、詩作行為を指して用いられた「苦吟」という言葉の中にも、この言葉の初源的な意味内容が生き続けていることが明らかにされた以上、私達はこの点を決して軽視すべきではないであらう。というのは、私達はここから、詩作行為を指して用いられる場合の「苦吟」という言葉が次のような意味内容をも含み持ち得ることを、確認しておくことができるからである。

第一に、詩作行為を指して用いられる「苦吟」の「苦」字に「現実的な生活感情としての憂苦・愁苦」といつた意味要素が含まれる以上、この言葉は、単なる純文学的な詩作への没頭のみに限らず、何らかの現実的憂苦をかかえこんだ形での詩作への没頭をも示し得ること。また第二に、「心をこめる・没頭する」といつた(2)の意味要素に専ら重点が置かれた場合、それは「唐才子傳」に見えた、司空圖的な能手多作な詩作への没頭・耽溺をも示し得ること。(ただ、実を言うと詩作品中に見える「苦吟」は、おおむね詩語特有の多義性・曖昧性を伴なっており、そうした詩作上の呻吟勞苦の意味の希薄な「苦吟」(「詩作行為への没頭」)の

明瞭な用例を探し出すことは、現実問題として極めて難かしい。しかし、次のような点——すなわち、先の劉禹錫・孟棻の文例には、詩作行為を示すものではないにせよ、「辛苦・勞苦」といった意味とは全く無縁の、「しきりに吟詠する」「ねんごろに心をこめて吟詠する」といった意味内容での「苦吟」の使用例が見える点。また、そうした没頭的態度を示す(2)的な意味は、この言葉が詩作行為を指して使用される場合においてもかなり広汎に、しかも本質的な形で意味内容中に取り入れられている点——を考慮に入れるならば、当時の「苦吟」という言葉は、呻吟勞苦的な要素の希薄な、たとえば先の司空圖の例に見られたようなタイプの詩作への没頭をも包含し得る、内容的な幅をすでに備えていたと見て差支えないであろう。

要するに、中晩唐期・詩作行為を指して用いられた「苦吟」という言葉には、このような様々なタイプの詩作への没頭一般を示し得る、意味的な広がりが備わっていたと考えられる。とすれば、私達はここから、この言葉の意味要素のうちで最も包括的な広がりとし初源的・本質的な性格とをあわせ持つ、(2)の意味要素を中心として、詩作行為を示す「苦吟」の意味内容を次のように把握し直しておくことができよう。すなわち、

中晩唐期、詩作行為を指して用いられる場合の「苦吟」は、一字一句の雕琢に精魂を傾けるといった、勞苦に満ちた詩作行為への没頭・耽溺をその中心的な意味内容としながら、現実的な憂苦をかかえこんでなされる詩作への没頭・あるいは能手多作なタイプの詩作への耽溺といった意味内容をも、その内に含み得る広がりも備えている。こゝに示した「苦吟」の意味内容を包括的な形で定義づけようとするならば、私達は從來

の「苦心して詩歌を作ること」といった詩書的な説明を退けて、むしろ、右に述べたような様々なタイプの苦吟を含み込む形の、「詩作に没頭すること」といったより広義な規定に従うべきであろう。

ところで、詩作行為を指して用いられる「苦吟」がこのような多様性・内容的な幅を持っているとすれば、私達は、豊田氏の所説に代表される「生みの苦しみの」的な「苦吟」観を、そのまま受け容れることはできないのではないだろうか。「苦吟」という言葉のそうした内容的な幅は、言うまでもなく、当時の詩人達の「苦吟」意識を反映したものに他ならなかつた筈である。とすれば、中晩唐期の詩人達の意識中における「苦吟」とは、上述のような多様性を内にかかえた、詩文学に対する没頭的風潮一般を意味していたことになる訳であり、従ってここから私達は、こうしたいわば広義の「苦吟」観に立った上での再検討を余儀なくされるのである。

ただ、そうは言っても現在の私には、こうした観点に立った上で「苦吟」を包括的に論じられるだけの能力がない。従って、本稿ではそうした考察の必要性を指摘するに留まらざるを得ないが、しかし、このような広義の「苦吟」観に立った場合、中晩唐期の「苦吟」が遙かに複雑で奥行の深い様相を呈して来ることは明らかであろう。

たとえば、その一例として、「苦吟」とそれをとりまく現実的背景との関係を取り上げてみよう。

豊田氏の「生みの苦しみの」といった純文学的な「苦吟」観においては全く対象外に置かれ

ていたこうした問題も、「現実的憂苦を抱いた形での詩作への没頭」を含む広義の「苦吟」観に立つならば、必然的に無視することができなくなる。とすれば、その現実に対する詩人達の対応の形にも、幾つかのタイプが考えられねばならないことになる。すなわち、(一)現実的な憂苦の発露の場を詩に求めるタイプの苦吟、或いはこれとは逆の、(二)現実的憂苦とは本来無縁であつて、純芸術的な衝動から詩作に没頭してゆくタイプの苦吟、さらにはまた、(三)現実的な憂苦を内面にかかえながら、その苦悩を意識的に捨象した地点に自己の詩を成立させようとするタイプの苦吟〔注5〕等々。そして、これらのそれぞれに異なったタイプの苦吟は、中晩唐期の「苦吟」的風潮の内に窺われる質的な差異として、また、一人の詩人の内面に見られる諸傾向として、個別的総合的両側面からの踏み込んだ考察が必要となってくるのである。

さらにこの他、一字一句に呻吟するタイプの苦吟と能手多作なタイプの苦吟との差異についても、詩人の個性・作風の相違といった単純な判断に終わらずに、詩文学に対する自覚意識の相違といった問題にまで掘り下げてみる必要があるように思われる。

こうした問題についての考察は、私自身にとつてすべて今後の課題ということになる訳であり、現在の段階ではこれ以上踏み込んだ議論は差し控えねばならない。しかし、いづれにせよ、中晩唐期の「苦吟」的風潮が、従来のような単純な解釈・規定によつて押え切れる対象でないことだけは、ここで再度強調しておいて良いであろう。

なお、「苦吟」という言葉の意味内容の検討とは別に、中晩唐期に至つて詩作品中に「苦

吟 \vee が急に頻見されるようになった現象自体についても、注目しておくことが必要であろう。何故なら、先にも指摘したように、詩作品中に \wedge 苦吟 \vee が歌われる為には、 \wedge 苦吟 \vee 行為を詩的素材と見做す何らかの文学的な自覚ないしは価値意識、或いは一種の美意識といったものが詩人達の精神のうちになければならない筈であり、従ってこのような観点に立つならば、私達はこの現象を、 \wedge 苦吟 \vee 行為に對する当時の詩人達の自覚意識のあらわれとして捕えなおしてみる事ができるからである。

こうした問題は、先の杜甫・錢起らにおける \wedge 苦吟 \vee 意識の自覚とも関連づけ、さらに中唐期以前と以後の文学意識の相違といった地点にまで視野を広げて論じられるべきであろうが、ただ、今の私には、そのいずれに關しても正面から取り組んでみるだけの精力がない。本稿では、中晚唐期の詩人達の \wedge 苦吟 \vee に對する自覚意識について、重要と思われる点を幾つか指摘して後日を期することにした。

(一) \wedge 苦吟 \vee に様々なタイプが見られたように、 \wedge 苦吟 \vee に對する自覚意識にも、複雑で多様な内容が窺われる。それらのうちで先ず最初に挙げられるのは、登用・顕達の為の \wedge 苦吟 \vee といった、一種功利的とも言える目的意識であろう。

周知のように、中唐期以降、詩文学は前代に類を見ない重視を受け、人材の登用・拔擢の際においても極めて重要な役割を果すに至っている。「一個讀書人生在那時代、總得做詩、做詩才有希望爬過第一層進身的階梯」というのは、聞一多の論文『賈島』に見える指摘であるが（『聞一多全集』第三冊・『唐詩雜論』三十七頁）、登用・顕達の為にはまず詩的才能が問われるといった当時の社会情況が、詩文学の荷い手である読書人層にどのような影響を

与えたかは、想像するに難くない。左に挙げる詩句からも明らかのように、それは一種の功利性を帯びた目的意識を彼等のうちに呼び起し、彼等の詩作への没頭（へ苦吟）をいやが上にも加熱化させていったのである。

平生詩稱稿在 平生 詩稱（稿）在あり

老達亦何妨 老達 亦た何ぞ妨げん

（李頻「富春贈孫璐」）

方期五字達 方まさに五字にて達せんことを期し

未厭一簞貧 未だ一簞の貧を厭わす

麗句勞相勉 麗句 相あい勉むるを勞し

余非樂釣綸 余すべて釣綸を樂しむに非あらず

（崔塗「春日郊居酬友人見貽」）

冥心坐似癡 冥心 坐すること痴なるに似に

寢食亦如遺 寢食も亦た遺すつるが如ごとし

爲覓出人句

爲に人より出づるの句を覓め

祇求當路知

祇だ當路の知らんことを求む

(曹松「言懷」)

私達はここから、登用・顕達といった目的意識を、へ苦吟を支える一つの重要な動機として数え上げることができよう。

ただ、ここで一ツ注意しておかなければならないのは、だからといってこの目的意識を卑俗な出世欲と決めつけるのは必ずしも正しくない、という点である。

成程、当時の詩人達のへ苦吟行為の背後には、多くそうした功利的な意識が働いていたようである。しかしそうした事實は、彼等が詩文学を出世の爲の単なる手段としてしか考えていなかったことの証左とはなり得ない。たとえば右の詩句中、崔塗・曹松は、登用を目指してなされる自身のへ苦吟を、極めて真摯な態度で声高に歌い上げているけれども、彼等のこうした姿勢は、彼等の内面にあつてこのへ苦吟行為が必ずしも出世の爲の単なる卑俗な手段としてではなく、読書人・官僚予備層たる彼等が取るに相応しい処世行為として考へられていたこと——言い換えるならば、彼等の読書人的な価値観のなかでへ苦吟が極めて高い価値を荷って評価・自覚されてきたこと——を遂に示しているのではないだろうか。

今の私には、こうした自覚の内実を充分解析してゆく能力がないが、しかしそれが、文学(あるいは文学行為)一般に極めて大きな価値を置く、中国の伝統的な文学観の流れを受け継いで成立していることは、ほぼ間違いない。(なお、中晩唐期、詩的才能が人材登用の際

の重要な基準になったという事実も、裏を返せば、そうした伝統的な文学観の中に見られた詩文学と社会的・政治的な有用性との結びつきが、この時期何らかの要因によって、極めて理念的な形で尖鋭化されたことを意味しているように思われる。)

とすれば、へ苦吟✓的風潮は、単なる功利的な目的意識からの動機づけのみによって説明されるに留まらず、さらにその背後に伝統的文学観の中晩唐的展開といった観点を絡ませた形で、考察してゆかれるべきだと考えられるのである。

(二) 右の登用・顕達の為のへ苦吟✓とは別に、次のようなへ苦吟✓も見逃してはならないであろう。

言懷 許棠

萬事不關心 万事 心に關せず

終朝但苦吟 終朝 但た苦吟す

久貧慙負債 久貧 負債を慙じ

漸老愛山深 漸老 山の深きを愛す

日月銷天外 日月 天外に銷きえ

帆檣棄海陰 帆檣 海陰に棄すつ

榮枯應己定

榮枯 応に己に定まるべし

無復繫浮沈

復た浮沈を繫ぐこと無からん

許棠は、「苦於詩文、性僻少合、既久困名場……」(『唐才子傳』卷九)と言われるように、長く不遇のうちで暮した詩人であったが、この作品には、そうした日々にあつての苦しい挫折感が、彼をへ苦吟へのうちへと閉じこめてゆく過程が歌われている。「榮枯應己定……」と諦観したこの詩人においては、詩作行為に伴なう現実的な功利性への期待はすでに薄い。ここに見えるへ苦吟は、登用・顕達といった目的意識とは逆の、むしろそうした目的の挫折による心の傷を癒す、慰藉としての性格から理解すべきであろう。

ところで、慰藉としてのへ苦吟を指摘したついでにいまひとつ取り上げておきたいのが、へ苦吟と隱逸的・脱俗的世界との結びつきである。今、私は右の許棠の作品に見えるへ苦吟を、慰藉としての性格から捕えてみたが、たとえば「漸老愛山深」といった詩句などに注目するならば、私達はさらにそこに、隱逸的な処生觀の投影を読み取るのが可能であろう。つまりこの詩人のへ苦吟の姿勢は、その背後にそうした隱逸的な処生觀、価値意識を一つの精神的支柱として伴なっており、従って私達はここに、へ苦吟を支える隱逸的・脱俗的な価値意識の存在を見出すことができるのである。

隱逸的・脱俗的世界と結びついたへ苦吟は他にも多いが、一・二例をあげれば次のようなものがある。

暮秋宿友人居 無可

招我郊居宿 我を招きて郊居に宿らしめ

開門但苦吟 門を開きて但だ苦吟す

秋眠山燒盡 秋眠 山燒尽き

暮歇竹園深 暮歇 竹園深し

寒浦鴻相叫 寒浦 鴻 相あ叫さけび

風窗月欲沈 風窗 月 沈まんと欲す

翻嫌坐禪石 翻かえ嫌いと坐禪石 禪石に坐して

不在此松陰 此の松陰にあ在らざりしを

酬荅退上人 齊己

鬚鬢三分白二分 鬚鬢 三分すれば 白きは二分

一生蹤跡出人羣 一生 蹤跡 人群を出いづ

高丘夢憶諸峯雪 高丘 夢に憶う 諸峰の雪

衡岳禪依五寺雲

衡岳 禪は依る五寺の雲

青衲幾臨高瀑濯

青衲 幾たびか高瀑に濯あうに臨みし

苦吟曾許斷猿聞

苦吟 曾かつて断猿の聞きくを許す

荒村殘臘相逢夜

荒村 殘臘 相あい逢うの夜

月滿鴻多楚水漬

月は満ち鴻は多し 楚水の漬ほり

右の二首の作者はいずれも僧侶であつて、登用・顕達といった目的意識とは本来無縁な人達と言へる。ここには、へ苦吟と脱俗的価値意識との結びつきが、いわば極めて純粹な形を取つて示されていると見てよいであらう。
これに対して、読書人における隠逸的・脱俗的へ苦吟は、当然のことながら、登用・顕達としばしば微妙に交錯する。先の許棠の場合は、顕達に対する諦念を支える形で隠逸的へ苦吟が歌われていたけれども、これとはまた別に、顕達に汲々とする処生を厭う、強い反俗意識を備えたへ苦吟の例も見受けられる。たとえば次の鄭谷の詩には、それが顕著に窺われよう。

靜吟 鄭谷

騷雅荒涼我未自安 騷雅 荒涼として 我未いまだ(自ら)安んぜず

月和餘雪夜吟寒

月は餘雪に和して 夜吟寒し

相門相客應相笑

相門の相客 忒まさに相あい笑うべきも

得句勝於得好官

句を得るは勝れり 好官を得たるに

なお、読書人層における脱俗的・反俗的傾向は、必ずしも登用顕達といった目的意識と蔽密に対置される訳ではなく、人格的な高潔さの主張という点から見れば、むしろそうした目的意識と抵触なく共存し得る性格を持つている。(たとえば、高潔な人格を備えた隠士・處士を辟召する習慣は、唐代においても盛んであった。)従つて、右の鄭谷の詩に見える反俗意識も、官界に背を向けた芸術至上主義態度といった方向から単純に捕えられるべきではなく、登用・顕達を願う意識との裏面での複雑な交錯が、同時に考慮されるべきである。

このように、隠逸的・脱俗的世界と結びついたへ苦吟も、それ自体かなり複雑な内容をかかえており、今後に残された問題は数多い。しかしそれはともかくとして、へ苦吟の風潮が隠逸的・脱俗的価値意識との関連において、是非とも検討されるべき重要な問題を内蔵しているという点は、以上の指摘によつても明らかにすることが出来たと思う。

(三) この他、へ苦吟を支える極めて純芸術的な衝動・およびその自覚といった点も、数え上げておかなければならない。たとえば、次に挙げる詩句にはいずれも、詩人達の内面に湧き起る抑え難い芸術的衝動が歌われている。

一日不作詩

一日 詩を作らざれば

心源如廢井

心源 廢井の如し

(賈島「戲贈友人」)

乍可百年無稱意

乍^{むし}可^し百年^な無^な稱^な意^べ

難教一日不吟詩

一日^{かた}として詩を吟ぜざらしむこと難し

(杜荀鶴「苦吟」)

鬢絲猶可染

鬢絲 猶^な可^べ染^も

詩病却難醫

詩病 却^{かえ}て^い難^{がた}醫^し

(裴説「寄曹松」)

そして、こうした芸術的衝動は、次の詩句に見えるような極めて強い創造の喜びと一体になつて、詩人の心を深く捕えていたと考えられる。

二句三年得 二句三年に得^え

一吟雙淚流 一吟すれば双淚流^{なが}

(賈島「題詩後」)

日日爲詩苦 日々 詩を作るに苦しむ

誰論春與秋 誰か春と秋とを論ぜん

一聯如得意 一聯 如し意を得れば

萬事総忘憂 万事 総て憂いを忘る

(歸仁「自遣」)

河薄星疎雪月孤 河薄く星疎らに 雪月 孤なり

松枝清氣入肌膚 松枝 清気 肌膚に入る

因知好句勝金玉 因りて知る 好句は金玉に勝れるを

心極神勞特地無 心極 神勞 特に無し

(貫休「苦吟」)

(一)において私は、中晩唐期のへ苦吟の風潮の隆盛を登用・顕達の為といった外的な要因から説明したが、反面、こうした純芸術的な創造の喜びの発見・自覚といった内的要因も、

忘れられてはならない重要なポイントであろう。

ところで、このような何物にも換え難い創造的な喜びを自覚したへ苦吟は、しばしば先の脱俗的価値意識と結びついて、一つの特筆すべき文学思想を生み出していったようである。たとえば、「二句三年得……」の賈島には次のようなエピソードが伝わっている。

賈島常以歲除取一年所得詩、
祭以酒脯曰、勞吾精神、以酒脯を以てして曰く、「吾が精神を勞せり。是を以て之を補う」と。
賈島 常に歳除を以て一年に得る所の詩を取り、祭るに

(『雲仙雜記』卷四)

へ苦吟の成果である詩作品が、ここでは一種宗教的な価値を付与されるまでに至っている。

そして、こうした宗教的な抽象性・理念性にまで高められた価値意識は、賈島よりおくれる次の二人の詩人のエピソードにおいては、仏教的な色彩を色濃く帯びてくるようになるのである。

(李)洞字才江、雍州人、諸 (李)洞 字は才江、雍州の人にして、諸王の孫なり。家

王之孫也。家貧、吟極苦、貧なるも、吟に極苦し、寢食を廢するに至る。賈長江を

至廢寢食、酷慕賈長江、遂

酷慕し、遂に銅にて島が像を写し、之を巾中に戴き、常

銅寫島像、戴之巾中、常持

に数珠を持して賈島仏と念ずること、一日に千遍なり。

數珠念賈島佛、一日千遍、

人に島を喜む者有れば、洞必ず島が詩を手録して之に贈

人有喜島者、洞必手録島詩

り、叮嚀ねんじょうなること再四にして曰く、「此れ仏教と異なる

贈之、叮嚀再四曰、此無異

無し、帰りて香を焚きて之を拜せしと。其の仰慕せるこ

佛經、歸焚香拜之、其仰慕

と一に何ぞ此の如く切なるや。

一何如此之切也、

(『唐詩紀事』卷九・李洞)

(周) 繇、江南人、……

(周) 繇は江南の人なり。…… 家貧しくして、

家貧、生理索莫、只苦篇韻、

生理索莫たるも、只だ篇韻に苦り、俯しては思い有り、

俯有思、仰有詠、深造閩域、

仰いでは詠ずる有り、深く閩域に至る。時に号して「詩

時號爲詩禪、

禪」と為す。

(『唐詩紀事』卷八・周繇)

殊に後者の周繇の記事は注目に値いしよう。ここには、へ苦吟の行為を禪と結びつけて見

る価値意識の、一般的な定着の様相が示されている。
また、これと同様の意識は、『唐詩紀事』の裴説の條に引かれている、次のような詩句にも窺われる。

(裴)説天復六年登甲科、

(裴)説

天復六年に甲科に登る。其の詩は得難きを苦

其詩以苦吟難得爲工、且拘

吟するを以て工と爲し、且つ格律に拘わる。嘗て詩有り

格律、嘗有詩曰、苦吟僧入

て曰く、「苦吟は僧の定に入るがごとく、得句は將の功

定、得句將成功、

を成すがごとし」と。

(『唐詩紀事』卷六十五・裴説)

以上のような例から私達は、へ苦吟を支える脱俗的な価値意識の一つとして、仏教と結びついた文学思想の存在を指摘することができると認めるが、ところでこの点には、文学思想史の面から見て、極めて興味深い問題が含まれている。

というのは、周知のようにこうした仏教思想(ことに禅思想)と詩文学との結合の傾向は、後の宋代、『滄浪詩話』の作者である嚴羽の『詩禪説』を頂点として隆盛を見ることになり、ここから溯つて考えると、右の例は、そうした傾向の来源としての意味を持つてくるからである。今、こうした側面を重視するならば、中晩唐期のへ苦吟的風潮は、この時代の弊内で完結している単体的な文学現象としてではなく、むしろ、後の宋代に開花する文学思想を

摸索・形成してゆく、歴史的な役割を荷った文学運動として、私達の前に浮かび上がって来ることになる。

とすれば、私達はへ苦吟の風潮を、単に、中晩唐という特異な状況の下で生起した極めて特殊な文学現象として、個別的な形でのみ眺めるべきではない。そうした視角とはまた別に、宋代的な文学思想成立の前提としての角度からも、これに検討を加えてゆかなければならないのである。

(四) なお、中晩唐期のへ苦吟を支える様々な意識のうちの一つとして、この他、へ苦吟に対して当時の詩人達が持った一種の美意識にも似た感情を指摘しておくべきであろう。

すでに見たように、中晩唐期の詩作品においては、「苦吟」という詩語がかなり頻繁に愛用され、さらには、ひたすら詩作に没頭するへ苦吟の詩人像が、好んで詩に歌われている。このような詩作品中におけるへ苦吟の頻出という現象は、これまでに指摘してきた幾つかの価値意識の自覚といった点から、おおよその説明はつけることができよう。しかし、それが、詩として歌われているという点を重視するならば、私達はさらにそこに、「苦吟」という言葉ないしはへ苦吟の詩人像が持つ、一種の心理的な屈折感・切迫感・倒錯的な自己主張等のイメージ・およびそれらに対する当時の詩人達の深い、美学的な共感——といった要素が加わって来ていることも見逃す訳にはゆかない。

そうしたへ苦吟のイメージの成立・さらにはそれに対する一種の美意識の誕生といった事象の背後に、詩人達の文学精神と彼等を取り捲く社会的・文学的環境とのどのような関わり合いが潜んでいるか——といった問題は、これまた私にとって将来に残された課題であ

る。しかし、へ苦吟にそうした複雑な屈折した美を感じ、感性は、明らかに中晩唐期以前の詩人達には見られなかつたものであり、従つて、この点のみに限つても、こうした美意識は、中晩唐期に特徴的な傾向として確認しておかれるべき意義を持つてゐるのである。

注2…「沈吟」の「吟」字は、必ずしも吟詠・詩作行為をあらわすとは限らず、「思いにふける」の意味に用いられる場合もあつたようである。たとえば、用例中にあげた魏・曹操の「短歌行」の「但爲君故、沈吟至今」に対して、「文選」六臣注は、「良曰、沈吟、深思之意」と解している。またこの他、同じ曹操の「秋胡行」に「遨遊八極、枕石漱流飲泉、沈吟不決、遂上升天」の句、曹植の「聖皇篇」に「陛下體仁慈、沈吟有愛戀」の句などが見られるが、これらはいずれも「思いにふける（＝沈思）」の意味であつて、吟詠・詩作の意味は伴なつていない。

注3…たとえば、「文心雕龍」の次のような論述を見ても、この文学理論書の著者たる梁の劉勰においては、へ苦吟行為が格別な価値観を伴つて認識されてはおらず、むしろ度をすぎた耽溺・労苦は有害とすら考えられていたことがわかる。

夫神思方運、萬塗競萌、
夫れ神思の方に運るや、万塗競い萌す。虚位を規矩し、

規矩虚位、刻鏤無形、登
無形に刻鏤す。山に登れば情は山に満ち、海を觀れば意

山則情滿於山、觀海則意

は海に溢る。

意は思に授かり、言は意

溢於海、……意授於

に授かる。密なれば則ち際無く、疏なれば則ち千里。或

思、言授於意、密則無際、

いは理は方寸に在って之を域表に求め、或いは義は咫尺

疏則千里、或理在方寸、

に在って思は山河を隔つ。是を以て心を乗り術を養いて、

而求之域表、或義在咫尺

苦慮を務めとする無く、章を含み契を司どりて、必ずし

而思隔山河、是以秉心養

も情を勞せざるなり。

術、無務苦慮、含章司契、

不必勞情也、(卷六・神思第二十六)

凡文集勝篇、不盈十一、

凡そ文集の勝篇は、十に一にも盈たず、篇章の秀句は、

篇章秀句、裁可百二、並

裁かに百に二なる可し。並に思合して自ずから逢い、

思合而自逢、非研慮所求

研慮の求むる所に非ざるなり。或いは晦塞もて深と為す

也、或有晦塞爲深、雖奧

有り、奥と雖も隠に非ず。雕削もて巧を取る有り、美と

非隱、雕削取巧、雖美非

雖も秀に非ず。

且夫思有利鈍、時有通塞、

沐則心覆、且或反常、神

之方昏、再三愈躓、是以

吐納文藝、務在節宣、清

和其心、調暢其氣、煩而

即捨、勿使壅滯、意得則

舒懷以命筆、理伏則投筆

以卷懷、逍遙以針勞、談

笑以藥勸、常弄閑於才鋒、

賈餘於文勇、使刃發如新、

腠理無滯、

(卷九・養氣 第四十二)

(※書き下し文は、興膳宏氏『文心雕龍』(筑摩世界古典文学全集25)の訓読によった。)

且つ夫れ思に利鈍有り、時に通塞有り。沐すれば心覆り、

且つ或いは常に反し、神の昏きに方っては、再三にして

愈よ躓る。是を以て文芸を吐納するは、務は節宣に在り。

其の心を清和にし、其の氣を調暢す。煩にして即ち捨て、

壅滯せ使むること勿れ。意得れば則ち懷を舒べて以て筆

に命じ、理伏すれば則ち筆を投じて以て懷を巻く。逍遙

して以て勞に針し、談笑して以て勸に藥し、常に閑を才

鋒に弄し、餘を文勇に賈い、刃を使得て発すること新たな

るが如くならしめ、腠理滯ること無からしむ。

凡神不安、令人不暢無興、

凡そ神安からざれば、人をして暢のみずして興無なからしむ。

無興即任睡、睡大養神、

興無なければ即ち睡るに任まかせ、睡りて大いに神を養なうべし。

常須夜停燈任自覺、不須

常に須らく夜、燈を停とどめて自覺に任すべくして、強いいて

強起、強起即昏迷、所覽

起おこすを須もちいず。強いいて起せば即ち昏迷し、覽る所益無な

無益、

し。……

須屏絶事務、專任情興、

須らく事務を屏絶し、専ら情の興おこるに任すべし。此これに因

因此、若有製作、皆奇逸、

りて、若し製作有れば、皆奇逸なり。看興まうや 稍まうやく歇やすき、

看興稍歇、且如詩未成、

且かつつ如し詩未いまだ成らざれば、後に興有るを待ちて成し、

待後有興成、却必不得強

却かえつて必かなず強いいて神を傷めしむるを得えざれ。

傷神、 (同)

初盛唐期以前の文学論に見られるニうした傾向に対して、へ苦吟がはじめて顕彰されるようになるのは、盛唐末から中唐期にかけての詩僧・皎然の『詩式』あたりからのことであらう。

(詩) 不要苦思、苦思則

「(詩)は苦思するを要せず。苦思すれば則ち自然の質

喪自然之質、此亦不然、

を喪うと。此れまた然らず。夫れ虎穴に入らずんば、

夫不入虎穴、焉得虎子、

焉んぞ虎子を得ん。取境の時には、至難至險を須ちて

取境之時、須至難至險、

始めて奇句を見るも、成篇の後に其の氣貌を觀れば、等

始見奇句、成篇之後、觀

間にして思わずして得るに似たる有り。此れ高手なり。

其氣貌、有似等間不思而

得、此高手也、(歷代詩話本句詩格取境)

盛唐末から中唐期にかけてを大まかな境界として、へ苦吟✓に対する文学的自覚の變化が想定されることは、以下の本文において指摘するけれども、そのことはこのように当時の文学批評・文学論の流れを辿ってみても言えることなのである。

なお、入谷仙介氏は『王維研究』(創文社・東洋学叢書)において、盛唐期以前を「速吟」の尊ばれた時代とする考えを述べておられるが(四二八と四一九頁)、これなども傾聴すべき意見であろう。ただ、こうした文学意識・文学思潮の変遷に関わる大きな問題を対象とする場合、さらに多角的な掘り下げた考察が必要とされることは言うまでもない。(最初に断ったように、本稿はへ苦吟✓に対する極めて初歩的な考察の試みでしかなく、そうした問題と正面から取り組める段階にはまだ辿りつけていない。従っ

て、現在のところこれ以上の議論は差し控えねばならないのであるが、いずれももう少し資料を揃え、考えをまとめた上で、稿を改めて論じ直してみるつもりである。)

注4、「吟」字には、先の「沈吟」の例に見られたように、吟詠・詩作行為以外の「物思いにふける」といった意味もある。しかし、私の手元の資料からは、「吟」字がそうした意味内容で用いられていると断言できる。「苦吟」の用例は、一例も見出せない。「苦吟」という熟語の中においては、そのような意味のみを純粹に持つことは恐らくないものと考えて、本表には採り上げなかった。

なお、「苦吟」の「吟」字の意味要素について、私は、(一)鳴声・歌声・吟詠と(二)詩作行為の二種類に分けておいたが、現実にはこの両者は必ずしも明確に区分できない。というのは、当時の詩作行為は、吟詠による詩句の推敲を伴なうのが常だった。ようだからである。たとえば、先の杜荀鶴の「秋夜苦吟」詩に見える「此時若有人來聽、……」の句、劉得仁の「夏日即事」詩の「到曉改詩句、四隣嫌苦吟」の句などにも、それは示されていよう。

注5、この(三)のタイプの苦吟的姿勢を取った詩人を挙げるにすれば、その一人に晩唐の司空圖を教えることができよう。彼は、屈折した現実的苦悩を内に抱えながら、「二十四詩品」に象徴される純芸術的詩世界の創造を目指した詩人であり、「白菊」詩では自ら次のように述べてもいる。

詩中有慮猶須戒

詩中 慮おぼんばかり有るは 猶なお須すべからく戒いましむべし

莫向詩中著不平

詩中むかに向むかつて不平あうを著あうわすこと莫なかれ

(「白菊」三首、其二)

なお、中晩唐期の詩人達の苦吟には、一見(一)的な純芸術的タイプの様相を呈しながら、その裏このような屈折した現実意識を背後に持つ例が、他にも意外と多いのではないだろうか。(たとえば、苦吟派の領袖的存在である賈島にも、そうした側面があるように思われる。)へ苦吟✓的風潮を考える場合、殊に留意すべきであろう。

III

以上、私は中晩唐期のへ苦吟✓的風潮について、「苦吟」という言葉の意味内容・使用情況を中心として、大まかな考察を試みてみた。

その結果、(一)へ苦吟✓は、単なる詩作上の生みの苦しみとして理解されるべきではなく、むしろ、詩文学に対する没頭的・耽溺的な姿勢一般として理解されるべきであること、(二)へまた、そうしたへ苦吟✓的風潮を支える要素として、当時の詩人達のへ苦吟✓に対する多様な価値意識、ないしは或る種の美意識の自覚を考えるべきであること、の二点を指摘するこ

とが出来たと思う。もし、(一)の点を前提とせず、へ苦吟をただ単なる「生みの苦しみ」のみ規定するとすれば、中晩唐期のへ苦吟の風潮は、純文学的な、いわば表現技巧上の探求心のみから起った文学現象として、必要以上に矮小化された内容の乏しいものになってしまふことになる。また、(二)の点を考慮せずに、へ苦吟を単に労苦に満ちた創作行為、ないしは創作への没頭の傾向といった形で捕えるとすれば、中晩唐期の詩人達のへ苦吟は、古今の文学者に共通な創造的労苦・没頭の創作態度一般に還元されてしまい、この時期のへ苦吟の風潮が含み持つ独自の自覚・文学精神、さらにはその文学史的な意義・役割といったものは、そこから全く浮かび上がってこないことになってしまおう。それ故に私は、中晩唐期のへ苦吟の風潮を考察するにあたって、少なくともこの二点だけは、あらかじめ念頭に置いておく必要があるのである。(従来への苦吟の理解は、これらの点の押え方が極めて曖昧——というよりもむしろ、これらの点の重要性についてほとんど無自覚——であった。)

なお、本稿での私の考察は、中晩唐期のへ苦吟が持つ諸特徴のいくつかを、言わば表面的に擲き上げてみたに過ぎず、それら特徴的な諸事項の背後の事情の解明にまでは、また手を伸ばすに至っていない。従って今後は、これまで述べたような多様なへ苦吟およびへ苦吟に対する価値意識が、中晩唐期のどのような社会的・文学的情况を背景として、また、そうした情况に対する詩人達のどのような対応・希求の形を因子として、生まれ育っていったのか——というような地点にまで、問題を押し進めてゆかなければならないであろう。また、へ苦吟が内包するそうした多様な要素・価値意識は、現実においては極めて複雑

に交錯・融合しあつており、本稿のようにそれをばらばらに切り離して指摘しただけでは、
へ苦吟✓という文学思潮の総体には到底近づけない。となると、この点に関しては今後、そ
うした諸要素・意識の複雑な交錯・融合そのものを考察の対象として、その中から或る一定
の傾向性・ないしは運動のパターンを抽出するという作業が要請されることになる。そ
してさらには、そうした一定の傾向性・パターンを時間的な流れの中で再整理してみること
によつて、中晩唐期へ苦吟✓的風潮自体の内にひそむ変遷・推移の歴史的な把握、といった
試みにまで進んでゆかなければならないであろう。

これらの作業は、いずれも現在の私の個人的な能力を超えた課題であり、一朝一夕の成果
は望めそうにない。しかし、そうした課題にいさなり正面から取り組むのではなく、右のよ
うな問題意識を念頭に置いた上で、この時期の主要な詩人達のへ苦吟✓を個別的に考察して
ゆくといった方法を取るとすれば、その困難さの幾分かは解消されるように思われる。そこ
で、私としては以後さしあたりこの方針に従い、中晩唐期の詩人達個々のへ苦吟✓を考察し
ながら、それを通じて、へ苦吟✓的風潮に対する私なりの構想を、少しずつ固めてゆくこと
にしたいと思つてゐる。

— 未完 —